

この鋭く確かなもの

栗林三千雄著「国語教育のめざすもの」

栗林さんには、主として大下学園国語科教
育研究会や、光葉会国語教育研究会でお目にか
かるのであるが、今度「国語教育のめざすも
の」が出版されて、研究会での発表や発言を
聞いて感心していたことがより確かになつた
ようである。

より確かになつたことは何かというと、ま
ず、第一に栗林さんの問題に対するとらえ方
がきわめて根底的であり、鋭いことである。

栗林さんは、わたしがいもつかかなかつたり、
あるいはこんなことは問題とするにあたらな
いと考へたりするようなことをとらえて、わ
たしどもの前に提出する。提出されてはじめ
てわたしはなるほどと思うのである。第二は、
この人の論文が、毎日の真剣な実践に支えら
れていることである。どの論文をとり上げて
も、そのことが想像できるのである。一編の
論文から毎日の実践の真剣さがうかがえると

いうことは容易なことではない。それだけこ

の人の国語教育に対する愛情は強く大きいの
である。第三は、文章表現の確かさと、語り
口のうちまきである。この人の詩人的素質とで
も言えるのであろうか。読んでいて、ついひ
きづりこまれてしまう文章である。それは、
年を忘れた柔軟な思考と幅広い読書や体験が
支えているのであろう。

本書の目次は次のようになっている。

I

一、「わかる」とはどういうことであるの
か

二、「ことば」とは何だろうか

——「小説について」「近代文体の

展開」をめぐる——

II

三、丘はどこにあるのか

四、どうして生徒は漢字をよみあやまるの

か

——漢字誤読のパターン化の試み——

五、漢字のよみ方テストをなぜするのか
六、漢字教育はどうなるのか

III

七、あなうめ形式のテストについて
八、落書の効用

IV

九、「現代国語」のめざすもの、それに
つ

いての私見

十、「論説文」とは何か

V

十一、なぜ論説文はかかれるのか

十二、否定の発想
——思考の基本的形態として——

VI

十三、教生日々

なお、まえがきを栗林さんのことばによれ
ば「旧友であり、あるときは師であつた」野
地先生が書かれ、あとがきは、著者が書いて
いる。

目次を見ると、十三編中、八編が疑問の形
を持つ題目である。こうした疑問の形をたど
つてみても、栗林さんのめざすものが何であ
るかをうかがうことができる。

どれをとりあげても、今日の国語教育にとって重要な問題指摘であり、どれから読んでも人柄がうかがわれる論集である。その中で、わたし個人の好みからいえば、「丘はどこにあるのか」「落書の効用」の二編にとくに目が開かれた思いがし、Ⅳの現代国語・論説文の三編にわたしと同じ問題をかかえながら、しかもわたしなどでは到底見通せない洞察力に敬服した。

こうした実践の中から生まれた実践者でなければいけない鋭い提言が、国語教育学の建設に大きな役割をはたすに違いない。今後とも栗林さんが鋭く確かな目をもって、わたしたちの目をひらいてくださることを期待したい。

(昭和48年6月1日、文化評論出版刊、

A5判二七六ページ、一三〇〇円)

(野宗睦夫)